

S系エリートごようたしの御用達ごようたしになりました

目次

S系エリートの御用達ごようたしになりまして

5

番外編 真夜中のエンゲージ

285

S系エリートでの御用達ようたしになりまして

ひどく緊張した。私、立河茉奈にとつて、こんな大きな会社で面接を受けるなんて、初めての経験だったのだ。

今年で二十六歳になる私は、就職してからずっとカフェ店員として働いている。けれどわけあって転職することになり、先ほど面接を受けてきた。

面接の結果は、信じられないことにその場で即採用。こんな幸運がまさか自分に巡ってくるなんて、思いもよらなかつた。

高揚して収まらない気持ち無理やり抑えつつ、ロビーを歩く。この仕事を紹介してくれた幼馴染に、早く報告したかつた。

面接前に対応してくれた受付の女性に小さく会釈して、通り過ぎた時だ。入口から来たスーツの男性と目が合った。

その途端、息が詰まりそうになる。瞬きもできず、見入ってしまう。

どうしてだか、その男性の視線もまた、私を見つめたまま動かない。時間が止まったように感じた。

互いに足だけは止まらず距離は縮まり、次第に相手の顔の輪郭や目鼻立ちまではつきりとわかるようになる。

彫りが深く、まるで精巧な石膏像のように整った顔立ち。

艶のある黒髪は、前髪が長めで、さらりとサイドに流れていた。髪の間から覗く双眸もまた、黒色。切れ長の目が意志の強そうな光を湛え、まっすぐに私を捉えている。

それが少しもブレないものだから、私も視線をそらすことができなかつた。

……どこかで、会つた？

すれ違うその瞬間まで見つめ合つたまま、彼の横を通り過ぎた。

それからはまっすぐ前を見て、ビルの外に出る。暖かい陽射しを浴びた瞬間、はあっと大きく息を吸つた。心臓がひどく高鳴って騒がしい。

……どうして、あんなにじっと見つめられたんだろう。

不思議に思い、首を傾げた。たまたま目が合つて、お互いに視線を外すタイミングを見失つただけだろうか？

だけど、それだけとは思えない強い眼差しだった。

それに、間近で見つめ合つた時、どこかで会つたことがあるような、妙な懐かしさが胸を過つたのだ。けれどその感覚を確かめようと記憶をさかのぼってみても、はつきりこれだと思えるものが見つからない。

やっぱり、ただ偶然目が合つただけだろう、と思い直した。

少し歩いたところで、今自分が出て来たばかりのビルを振り仰ぐ。近代的なビルで、中はとても綺麗だった。

面接の三十分前にここに到着した時は、こうして見上げただけで足が竦んでいた。いまだに心臓がドキドキとうるさい。

私が面接を受けたK&Vホールディングスは、日本で知らない人はまずいない大企業だ。コーヒーを主とした食品メーカーで、世界中にコーヒーチェーン店も展開している。経営母体の規模は、これまで自分が働いていた小さなカフェとは比べものにならない。

とはいえ、私はただのカフェの店員。バリスタとして、K&Vホールディングスの本社ビル一階にあるカフェの面接に来たのだ。

だからつぎ、一階のカフェで面接をするのだと思っていた。けれど、通されたのは応接室で、面接をしてくれたのはK&Vホールディングス人事部の人。

本社にある直営カフェということで、店員は全員、本社所属の社員として雇われるのだとか。そんな説明を、面接官の男性がしてくれた。年配の柔らかい印象の人だったのでよかったものの、もしも厳しい人に当たっていたら、立派な応接室の雰囲気も相まって、もっとガチガチに緊張していたかもしれない。

ともあれ、来週から働けることになり、本当にほっとした。今住んでいる場所から電車一本で通勤できるので、私にとってはいいことづくめの就職先だ。

興奮冷めやらぬ帰り道。最寄り駅からアパートへ向かいながら、この就職のきっかけを作ってくれた幼馴染に電話をした。

「颯太くん！」

弾む声を抑えきれず、つい声高に名前を呼んでしまう。電話の向こうで『うわっ』と驚く声があった。

『茉奈？ その声の感じじゃ、うまくいったのか？』

『採用になった！ほんとにありがとう！ラテアートもさせてもらえるって！』

『そりゃよかった。俺はまあ、知り合いに頼んだだけなんだけど』

ふたつ年上の幼馴染、杉本颯太とは実家が隣同士で、社会人になった今でも互いに連絡を取り合っている。

今回、とある理由で職を失うことになった私を心配して、彼は今までと同じようなカフェの仕事を探し、知り合いを通じて面接の約束まで取りつけてくれたのだ。それがまさか、こんな大手の会社だとは思わなかったけれど。

「その人にも、ちゃんとお礼を言いたい。どういう知り合いなの？」

聞いてみたが、なぜだか言葉を濁すような唸り声が返ってきた。

「颯太くん？」

『まあ……友達だけど。礼とかはいって。照れ屋なんだよ』

「えっ。颯太くんの友達で人事に関わるような人がいるの？」

颯太くんは今年二十八歳だから、年上の友人だとしても、せいぜい三十代じゃないだろうか？
だというのに、こんな大きな会社の人事に口を出せるって、一体どういう人なのだろう。

『まあ、あんま追及しないで。悪い話じゃなかったろ』

「うん、怖いくらいいい話だったけど……」

だからそちちゃんとお礼を言いたかったのだが、それ以上は聞き出せそうになく諦めた。

颯太くんは美容師だから、様々な職種の人と出会う機会が多いはず。お客様のひとりなのだとしたら、あまり詳しく話せないのもうなずけた。

その人に十分お礼を言っておいてくれと頼んで通話を切り、足早に家路をたどる。

引越してきたばかりのアパートは、駅から歩いて三十分ほどかかる不便な場所にあり、だけどそのおかげで家賃は安い。

さびれた印象で、空き部屋が多いのが少し不安だった。確か不動産屋は、築二十年だと言っていただろう。各階五部屋ずつの三階建てで、私の部屋は二階の角になる。

ネームプレートはつけていない。一応用意はしてあるのだが、事情があつて、怖くて使用しないままだった。

部屋に入ると、まだ梱包ぐんぽうの解とけていない段ボールが隅に積んである。引越して二週間が経つというのに、早く仕事を決めなければと焦ってばかりで、片づけのほうは捗はたっていなかった。

「これ、今週中に片づけなくちゃ」

仕事が決まって、これで不安がひとつ解消されたのだ。少し休憩したら早速荷解はらきをはじめよう。

颯太くんのおかげで、新生活にようやく明るく見えたと思っていた時だった。

スマートフォンが着信を知らせて震え、びくつと肩が跳ねる。

「……また、田所さん」

手にしたスマホの画面には、先月まで勤めていた店のマスターの名字が表示されている。

登録を消してしまいたかったけれど、どうせかかってくるなら名前が表示されるほうがうっかり出してしまうがと、そのままにしていた。

……お店さえ辞めたら、大丈夫だと思つたのに。

溜息をついて、スマホをローテーブルの上に置いた。

着信はまだ鳴りやまない。いつそのこと電源を落としてしまおうか。あるいは着信拒否にしてしまおうかと考えながらスマホを見つめる。

私は二十歳の頃からずっとカフェスタッフの仕事をしている。

最初のカフェに三年、そのあと勤めたのが先月までいた店だ。ラテアートが上手な先輩がいて、教わるきっかけになった馴染みある場所だった。

それでも辞めた。理由は、田所さんからの執拗しつようなアプローチ。

一年ほど前からだろうか。急に言い寄られるようになり、何度当たり障りなくかわしてもしつこく食事に誘われた。

田所さんは、年は確か、三十五、六と言っていた。別に変な人、というわけじゃない。ちょっと年の差はあるけれど、背も高いしカッコいい部類の人だと思う。

問題なのは、彼が既婚者だということだ。

仕事をしている間も、視線や言葉、その声音に彼の好意が滲み出ていた。そんな状況で食事に誘われて、気軽についていけないはずがない。

断り続けるうちに、家の前で待ち伏せのような真似までされるようになり、一度怖いと思ったらもうダメだった。

このままでは仕事にもならないと、思い切って店を辞め、引越を決めたのだ。

——ようやく途切れた着信に、ほっと安堵の息を吐く。

この新しいアパートを田所さんは知らないのだから、必要以上に怖がることはない。そう思って、私はスマホを操作し、彼の番号を着信拒否に設定した。

いつか自分でカフェを開業するのが夢だ。可愛らしいラテアートで女性の心がホッと和むような、そんなカフェにしたい。

そのためにずっと勉強してお金も貯めてきた。この引越しにかかった出費は正直痛かったけれど、決して諦めたわけではない。

ここから、再スタートすればいい。新しい知識を吸収できるかもしれないし、出直すには絶好の機会だ。

そう自分を励まして、面接用のスーツから楽な格好に着替えると、長い髪をきゅつとうしろでひとつに結び直す。

「よし！ まずは今日中に段ボールを全部開ける！」

それから、カーテンを新調しに買い物に行こう。そう意気込んで、私は段ボール箱のひとつを開いた。

* * *

初夏の気候、というには気温が高い。しかも雨が近いのか、湿気を含んだ空気が肌にまとわりつくように、体感温度を上げている。

もともと、店内は過ごしやすい温度と湿度に調整されているけれど。

「立河さん、これ三番テーブルをお願い！」

「はいっ」

アイスカフェラテをふたつ、窓際の一番奥にある三番テーブルへ運ぶ。

勤めはじめて一週間、私は順調に新生活を送っている。

今、アイスカフェラテを私に託したのはこの店の店長で、三十代の女性だ。初日に紹介されて、男の人じゃないことにほっとした。

スタッフは私を入れて六人。全員女性で、前の店で怖い思いをした私としては、安心して仕事ができるありがたい環境だった。

このカフェの朝は、忙しい。

八時半に開店してから約一時間くらいが、ランチタイムに匹敵するくらいの繁忙時間帯だ。

ここでモーニングを食べる社員もいれば、オフィスまでコーヒーをテイクアウトしていく人もいて、店内はとても賑わっている。

この会社の社員だけでなく、当然通りがかりのお客様もいた。

ひっきりなしにお客様が入りして、あつという間に一時間が経過すれば、次はランチタイムの準備が始まる。

シフトは早番、中番、遅番の三パターンだ。早番が朝八時から夕方四時まで、中番は十一時から夕方六時まで遅番は午後三時から閉店まで。忙しい時間にうまく人が重なるようにシフトを組んである。

中番の子が出勤し、昼の忙しい時間が終わったあと。早番だった店長と私は、一緒に昼休憩を取ることになった。

賄いに店のパンをどれかひとつと、好きな飲み物を淹れていいことになっている。私はいつもカフェラテだ。

エスプレッソを淹れたカップに、スチームミルクを注ぐ。濃厚なコーヒーと甘いミルクの香りが混ざり合い、カップからふわりと立ち上った。その香りを深く吸い込む。私の好きな瞬間だ。

ミルクを注ぐにつれ、エスプレッソと、スチームミルクの泡とが混ざり合っていく。この時にできる模様で絵を描くのがラテアートだ。コツをつかむまではうまく混ざらなくて綺麗な模様ができず、不思議と味もいまいちになったりする。

自信をもって提供できるようになった今では、懐かしい話だけれど。

店長の分とふたつ、休憩室に運んでひとつを手渡す。すると店長はカップをまじまじと見て口を開いた。

「立河さんって、ほんとにラテアート上手ねえ」

「ありがとうございます」

本当に感心した様子で言われると、照れてしまう。

「今日はリーフにしてみました」

「スチームミルクが均一で模様も繊細で、ホントに綺麗。取締役のコネ入社だって聞いてたから、どんな子が来るのかと思っただけ……ちゃんと仕事ができる子でほっとしたわ」

「えっ」

驚いて店長の顔を見ると、彼女はカップに口をつけて「美味しい」と満足げにうなずいている。嬉しい。けれど、店長の言葉をそのまま聞き流すわけにはいかなかった。

「取締役のコネって……?」

「え? もしかして知らなかったの?」

「はい。人づてに紹介していただいたことは確かなんですが……誰なのかは全然知らなかったです。取締役って偉い人ですよね」

そんな人と颯太くんがどうして知り合いなんだろう? やっぱり彼のお客さんなのだろうか? だけどそれにしたって、美容師と客というだけで、その幼馴染の就職にまで手を貸してくれたりするとは思えない。なんとなく釈然としないものがあり、一体どんな人なのだろうと興味を引か

れた。

「柏木さんっていつてね、いずれこの会社のトップに立つ人よ」

「ええっ？」

「現社長のご子息。この春に海外支社から戻って、取締役専務に就任したばかりなのよ。すごく綺麗な男性だから、王子って呼ばれてるわ」

「王子って……」

いくらなんでも日本人に“王子”だなんて、イメージが合わないだろう。つい笑ってしまいそうになったが、その時ふと、ある顔が浮かんだ。

面接に来た日、ロビーですれ違った男の人。

あの人なら、確かに王子と言われても遜色ない風貌だ。綺麗だけでなく、とにかく存在感のある人だったと思いが出す。

「実物を見たら、立河さんも納得するわよ」

そう言われ、きつとあの人に違いないと根拠のない確信を抱く。

同時に、少しがっかりした。本当にそんな偉い人が口利きしてくれたのなら、直接お礼を言うことはきつと叫びたいだろう。

「見てみたいですけど、会えることなんてそうそうないですよ」

あのロビーですれ違ったのは、ただラッキーだったからに違いない。それに、この先似たような機会があったとしても、いきなり声をかけることなど逆に失礼だろう。

諦めモードになって溜息をつく。が、店長は「そんなことないかもよ」と笑った。

「えっ？」

「何度かコーヒーを買いに来たもの。会計のついでにだけど、結構気さくに話してくれるし、感じのいい人だったわよ」

「ほんとですか？」

だったら、少しは話すチャンスがあるだろうか。名乗ってお礼だけでも言えれば、それで十分なのだから。

昼食を食べ終え、店長とふたりで一度店を出てビルのロビーへ向かう。お手洗いがカフェの店内にはなく、ビルの一階ロビーにしかないからだ。

そこで簡単に化粧直しをして、店に戻った時だった。

「立河さん、立河さん！」

興奮気味に私を呼んだのは、今日は中番で出勤の香山さんだ。私よりふたつほど若い子だけれど、気軽に接してくれるので話しやすい。その彼女が、やたら慌てて私を手招きしていた。

「どうかしたんですか？」

「立河さんって、王子と知り合いなんですか!？」

「えっ」

頬を紅潮させて勢いよく食いつかれ、展開がつかめずに首を傾げる。

「知り合い、というか……私の幼馴染の知り合い？」

結局颯太くんはなにも教えてくれなかったから、そこも定かではないのだけど。

「香山さん、どうして急にそんなことを？」

「今！ 王子がコーヒーをテイクアウトしに来られて、『立河茉莉さんはいらっしやいますか』って！ 名指しですよ名指し！」

「そうなの？」

しまった。化粧直しをもう少し早くすませていれば、会えたかもしれない。だけどもさか、向こうから私に接触してくるとは、まったく予想していなかった。

「なんだろう……」

会えたらお礼を言いたい、とは思っていたけれど。

柏木さんのほうも、私になにか用があるのだろうか。それとも採用した手前、一応どんな人間か会っておきたいことだろうか。

「話が見たいって。また来るって言ってましたよ。ほんとタッチの差でした」

「そうなんだ……ありがとう」

会いたいような怖いような、どちらともいえない緊張感に鼓動が速くなった。

それから数日は、王子——もとい柏木さんが来店することはなく、日々の業務に追われていた。あれからどうしても気になって、颯太くんに電話してみたのだが、彼も仕事が忙しそうで時間が合わず、メッセージのやりとりしかできなかった。

『私を紹介してくれた人、取締役って言ってたよ。どういう知り合いなの？』

『会った？』

『会えてはいないけど』

このあと返信がくるまで少し間が空いたのだが、それは単に忙しかったからなのか返事に迷ったからなのか、私にはわからない。

『同級生だよ。こないだ同窓会で久しぶりに会った』

そんなふうに簡単に返事があった、それ以上は聞けなかった。

——颯太くんの同級生に、柏木なんて人いたかなあ。

学生の頃の記憶をたどる。颯太くんと私は学年が違うけど、仲がよかった人の名字くらいは聞き覚えがあってもおかしくない。

だけどどれだけ記憶をたどっても、柏木という名字は出てこなかった。

「立河さん、二番テーブルにラテアートふたつお願いします」

「はいっ」

店ではラテアートを任せてもらえるようになって、とにかく今は仕事が楽しくてしょうがない。

二番テーブルに目をやると、可愛らしい雰囲気のお客様がふたり座っていた。

——なににしようかな。ハートとフラワーリーフがいいかな。

お客様の希望に合わせてできるようになれたらいいな、とか、やってみたいことはいろいろある。クマやスワン、キャラクターものも描いてみたい。

けれど今日のところはフラワーリーフに小さなハートを作って、香山さんにテーブルへ届けてもらった。

「わ、可愛い！」

テーブル席から弾んだ声が聞こえ、嬉しくてつい頬が緩む。

「評判いいですよね、ラテアート！ 今までうちでは出してなかったけど、ああいうの聞くと嬉しくなっちゃいますね」

「うん。私もそれが嬉しくて練習しはじめたの。香山さん、休憩だよ。ラテ淹れようか？」

「クマさんとかできますか？」

「できるよ」

エスプレッソマシンの前に立ち、彼女用のカフェラテを淹れていると、感嘆の言葉と溜息が聞こえてきた。

「はー……かっこいいですねえ」

「香山さんも練習してみろ？」

「はい、いつか。今はこうして見てるだけで楽しいです」

「あはは。もうちょっと待ってね」

カクテルピンを使い、泡の表面を細かく突いて線を描く。早くしないと、コーヒーが冷めてしまいうし泡もへたってしまう。

カップに視線を落として集中していると、「……あ」と香山さんが小さな声をもらった。

それからすぐに、「立河さんっ」と興奮した声で話しかけてくる。

「うん？ ちょっと待ってね、もう少し……」

手元ばかり見ていたから、私はまったく状況を把握していなかった。

「立河さんってば！」

「あっ！」

香山さんが突然肩をつかむから、手元が狂ってクマの目が片方、吊り目になってしまった。

「ああ……歪んじやった。どうかしたの？」

「クマさんどころじゃないですってば、あれ！」

やっとカップから顔を上げると、香山さんがひどく高揚した様子で私のうしろを指さしている。

「え？」

彼女の示す方向へ目をやった。

店長がテイクアウト専用の注文カウンターで接客をしていて、ちらっと私のほうへ視線を投げる。そしてわずかに遅れて、お客様らしいスーツの男性もこちらに目を向けた。ぱちつと目が合った途端、とくとひとひとつ、心臓が跳ねる。

——あの人だ。

怖いくらいに整った顔に、今日は優しいな微笑みを湛えている。

間違いない。面接の日、見つめ合いながらすれ違った、あの人だ。

「あれが王子ですよ！ 柏木さんですよ！」

香山さんの声はボリュームを抑えながらも、興奮気味だった。

それを聞きつつ、私の目はすっかり彼に釘づけだ。その笑みが明らかに私に向けられ、深みを増した時、ぼぼっと顔から火が出そうになった。

「立河さん！」と、店長に呼ばれて思わず肩が跳ねる。

あの日と同じように、すっかり彼の視線に捕まってしまっていたのだ。

「柏木さんが、立河さんと話したいって」

一瞬、店内がざわめいた。テーブル席のほうへ目をやれば、スーツの女性が数人、ひそひそと何事かを話しながらこちらの様子をうかがっている。

さすが王子。カフェの店員にただ声をかけるだけで、こんなにも注目されるなんて。

気話まりじゃないのだろうか。

そんなことを思いながら「はい」と返事をして、店長と入れ替わるように柏木さんに近づいた。

目が合うと、ふたたび彼が柔らかく微笑む。その微笑みの、まあ美しいこと。

「立河葉奈です。このたびは大変お世話になりました」

コネ入社に手を貸したなどと周囲に思われたら、きっと迷惑だろう。そう考え、詳細はあえて言葉にせず、お礼だけを述べて丁寧に頭を下げる。

すると頭上から、くすりと含み笑いが聞こえた。

「俺が誰だかわからないか」

「え？」

驚いて顔を上げると、彼はまっすぐに私を見ていた。

「あの……面接の日にロビーで会った方、ですよね？」

きつと、これが正解ではないだろう。そう思いつつも、今はその記憶しか出てこない。

「そうだな。けど、それよりずっと前から俺はお前のことを知っている」

案の定、不正解だった。

見れば見るほど知らない人で、ただ困惑する。けれどじっと目を見つめているうちに、ほんの少し、なにかがちくりと記憶を刺激した。

なんだろう。確かにどこかで会ったことがあるような、そんな気はする。だけど、思い出せない。芸能人に似ているとか？ 確かに俳優だと言われても納得してしまう顔立ちだが……それもなんだかしっくりこない。

懸命に記憶をたどるものの思い出せなくて、やはり気のせいだと片づけてしまうことにした。

「……あの、どなたかとお間違えじゃないですか？」

私がそう言うと、柏木さんの笑みが深くなる。それが少し怖くて、私は身を竦ませた。思い出せないことを、彼が怒っている気がしたのだ。

柏木さんが私の顔を覗き込むように腰をかがめ、顔を近づけてくる。

三日月みたいに弧を描いたふたつの目と薄い唇が、一瞬、得体の知れないものに見えた。思わず一歩あとずさった私を、なおも微笑みが追いかけてくる。

「……俺はひと目ですぐにわかったのに」

「すつ、すみません。でも、本当に……」

本当に、わからないのだ。思い出せないことが申し訳なくて、まっすぐに私を見つめる目に責められているようで、うつむいて視線をそらす。だけど、それがいけなかった。

突然——大きな手に、顎をすくいあげられる。強制的に上向かされ、彼の視線に捕まった。「ひどいな」

彼の瞳に自分が映って見える。それほどの至近距離で見つめられ、どくん、と大きく心臓が飛び跳ねた。そのあとドクドクと早鐘を打ち続ける。

店内がどよめくが、私はそれどころではなくて、人の目を気にする余裕など失っていた。

なんて熱い目で私を見るんだろう。かあっと顔が熱くなりパニックになっていると、彼の唇がにっと意地悪そうに歪んだ。

「今夜、食事に行こう。それまでに思い出せたら許そうか」

「えっ!？」

予想外の展開に頭がまったくついていかない。

彼は上半身を起こし、すつと背筋を伸ばす。そして内ポケットから名刺入れを取り出すと、一枚引き抜いて差し出した。

「話したい。仕事が終わる頃に迎えに来る」

戸惑いから受け取れずにいると、手のひらに名刺を押しつけられる。さすがにそのまま落とすわけにはいかず、名刺は私の手に収まった。

彼はとりあえずそれで満足したらしい。腕時計で時間を確認すると、店長からテイクアウトのコーヒーを受け取る。

「じゃあ、あとで。思い出せるといいな?」

そう言っ、彼は返事も聞かずに背中を向けた。

「ちよつ、私、行くなんて一言も」

私の声があとを追いかけたけど、それは綺麗にスルーされた。

数秒ぽかんとしてから、手の中の名刺に目を落とす。

事務用の名刺なのだろうけど、ちゃっかり携帯番号が直筆で書いてある。プライベートのものだろうか? 渡すつもりで準備していたのだとしたら、抜け目がないというか、誘い慣れているとうか。

じっと名刺を睨んでいると、背後から視線を感じた。

「わっ!」

振り向くと、香山さんと店長がそわそわしながら私の手元を覗き込んでいた。

「店長……プライベートの番号つきですよ」

「なんか今、ドラマの序章を見ているような気分だったわ。……立河さん、どうするの?」

ふたりして目を爛々と輝かせ、私の反応を待っている。

「どうするもこうするも……返事する前に帰ってしまったし……」

「というか、やっぱり柏木さん、立河さんのこと知ってるような口ぶりじゃなかったですか?」

「でも、本当に覚えがないんだけど……」

『俺はひと目ですぐにはわかったのに』

あの日、ロビーですれ違った時には、彼はもう私が誰かわかっていたということだろうか。

「昔、付き合った男とか？」

「いえ、さすがに付き合った人の顔くらいは覚えてますよ。それに、柏木って名字の人と今まで知り合ったことは……」

だけど確かに……なにか、記憶に引っかかるものがある。

あの人の表情を見てみると、懐かしいような、苦しいような感情が胸の奥を引っかくのだ。

特に、私が『どなたかとお間違えじゃないですか』と尋ねたあとの顔。笑っているのに怖かった。一見とても穏やかそうな人なのに、その一瞬だけはすごく意地悪に見えて――

手がかりを求めて、もう一度名刺に視線を落とす。

……柏木。やはり、名字には覚えがない。柏木……彰^{あきら}。

「……彰？」

名字ではなく、下の名前により強い引っかかりを覚える。「柏木」ではさっぱりわからなかったが、「彰」という名前から、記憶の底に沈んだ人物が浮き上がった。

知っている。「彰」という名前の人を、ひとりだけ知っている。

でも、名字が違う。「柏木」ではなくて、確か……そうだ、谷崎^{たにざき}。

「……彰、くん？」

声に出した途端、急激にそれは確信が変わった。

間違いない。名字は違うけれど、絶対そうだ。子供の頃の面影^{おもかげ}を成長させたら、確かにあんな顔立ちになるかもしれない。

「なに？ やっぱり知り合ってた？」

呆然として名刺を凝視する私に、店長が声をかけてくる。けれど私は、答える暇もないほど必死で子供の頃の記憶を掘り起こしていた。

いい思い出など出てこない。意地悪を言われて、泣かされたあれやこれやが蘇^{よみがえ}る。

さらにはさつき、わけがわからないまま言い逃げされた言葉を思い出して血の気が引いた。

――迎えに来るって？ 彰くんが？ 嘘でしょう？

颯太くんが、誰に紹介してもらった仕事なのか、なかなか言わない理由がわかった。

私が彰くんがいい感情を持っていないことを知っているからだ。

あの彰ちゃんと食事なんて、冗談じゃない。絶対無理だ。お礼は言うけど、食事にまで付き合えない。

名刺をゴミ箱に捨てたい衝動をどうにか堪^{こた}え、乱暴にカフェエプロンのポケットに押し込んだ。

さすがに、他人様の名刺をそこらに捨てるのは失礼だ。けど、関わりたくない、というのが本音だった。

そのあとは、どうやって彼から逃げ出そうかと、そればかり考えて仕事に集中できなかった。

子供の頃、私は人見知りが激しくて、同年代の友達がまったくいなかった。

隣に住む颯太くんだけが気が許せる友達で、帰ったら必ずといっていいほど彼の家に遊びに行っていた。そこに大抵一緒にいたのが、彰くん。谷崎彰だった。

『颯太くん、なにに行くの？ 私も行きたい』

『サッカーだけど、見に来る？』

『いいの？ 行く！』

『いいわけないだろ！ お前がついてきたらやりにくい！』

『そんなこと言うなって、彰。いいよ、茉奈ちゃん行こ』

颯太くんは私に優しく、彰くんはそれが気に入らないのか、私には意地悪ばかり。きつと、私があると男の子の遊びがしにくかったのだろう。

それにしたって『チビ』だの『ブス』だのひどかった。そのたびに私が泣くから、余計にイライラしたのかもしれない。『泣いてばっかで、ましてウザい』とよくぼやかれたものだ。

ふたりが所属していたサッカーチームの試合の時には、他の女の子も見に来ているのに、『早く帰れ』と無理やり追い払われたこともある。

ふたりとも顔立ちは綺麗きれいだったから、女の子には人気があったように思う。学年が違うのでよく

は知らないが、クラスでも中心的な存在だったようだ。

一方、私は人見知りが一向に直らず、クラスで孤立していた。目立つ女の子のグループに陰口を言われ、居場所がどこにもなかった。

そんなことから、たとえ彰くんに意地悪を言われても、ふたりにくつついているほうが楽だったのだ。彰くんのこと、怖いとは思っていてもそんなに嫌いじゃなかった。

彼にはつきりと拒絶されたのは、中学に入ったばかりの時だ。

『いい加減にしろよ。俺も颯太もまじで迷惑してんだよ』

冷たい言葉で遠ざけられ、そのあと本当に近寄らせてもらえなかったし、私から近寄るのも怖くなった。

いつまでも彼らに頼ってばかりではいけなかったのだと今ならわかるけれど、その時にはそんな余裕もなかった。

そのうち一年が経過して彰くんたちは卒業し、彼はどこか遠くに引っ越したのだと颯太くんからは聞いた。

「へえ。そんな風に見えなかったけど」

お客の途切れた時間に私の昔話を聞いて、店長は意外だと目を見開いた。

「ほんとなんです。すつごく意地悪で」

「そうじゃなくて。立河さん、そんな大人しかったんだ。今はそういう感じしないあつて」

「あ……それは、だいたい訓練したので……優しそうな子を探して声をかけてみたり、いろいろ……」
友達を作るのにもかなり苦労したけれど、泣きそうな時は彰くんに言われた言葉を思い出して我慢した。

時間はかかったが、高校を卒業する頃には少ないながらも気を許せる友達ができた。

今にして思えば、あの一言のおかげで今の私があるので、多少の感謝の気持ちはある。

だけど当時の彼にとっては、ただ鬱陶しかっただけに決まっている。

なによりあの時は本当に悲しかったのだから、わざわざ感謝しているなどと伝える必要はないだろうし、一方的な食事の誘いに応じる義理もない。

そう思ったが、店長の次の言葉が、逃亡路線に傾きかけていた私の心を引き留めた。

「えらいじゃない。立河さんみたいに、柏木さんも変わったんじゃない？　いつまでも子供の頃のままじゃないわよ」

言葉に詰まった。子供の頃の印象をそのまま引きずって、私のほうが大人げないような、そんな気持ちにさせられた。

けど、私にとってそう簡単に解消できるわけばかりでもない。

現在の時刻は、夕方六時の少し前。今日は中番で出勤しているので、もうじき私の仕事が終わる時間だ。

「私の上がり時間なんて知らないくせに、ほんとに来るんでしょうか」

そもそも、本当に来るつもりなら、あの時私に仕事が終わる時間ぐらい聞いただろう。やっぱり、からかわれただけなのかもしれない。

それならそれで、彼をわざわざ待つ必要もないし、悩まなくてすむ。

そう思ったのだが……

「あ、私言った。オーダーの時、一緒に聞かれたから」

店長が悪びれずにそう言って、密かに抱いた望みは絶たれてしまう。

「店長おお」

「取締役に聞かれて答えないわけにはいかないわよ、悪いけど」

店長がひよい、と肩を疎める姿を見て溜息をつき、私は腹をくくった。

できれば会いたくないという気持ちのほうが強いが、そんなわけにもいかなそうだ。ただ、目立つのだけはゴメンだった。

店にはこの社員もたくさん来店する。仕事が終わって待ち合わせしていたり、残業のためのコーヒーやパンを買いに来たりと、この時間はなかなか賑やかなのだ。

そんなところに柏木さんが迎えに来たら、目立つに決まっていた。

……外で待とう。そのほうがまだマシだ。

店の出入口が見えるところで待って、彼が来た時にこちらから声をかければいい。

「すみません、もし柏木さんが来られたら、外で待ってますとお伝えしてください」

六時きつかりにタイムカードを押して、念のため店長にそう伝えた。

この店の出入口は、ビルの一階フロアにつながるほうと、大通りに面した一般客用とふたつある。私は大通りのほうから店を出ようとした。

その時、自動ドアが開いて風が吹き込んでくる。

「ああ、間に合ったな。時間がギリギリだったから、入れ違いになるかと思ったが」

そう言いながら入ってきた男性が、腕時計に落としていた視線を上げた時、ぱちりと合った。

穏やかそうでいて妖艶な微笑を浮かべて立っているのは、もちろん彰くん……いや、柏木さんだ。顔立ちには、確かに子供の頃の面影がある。だけど見せる表情はまったく別人だ。

「な……なんで外から」

「外回りから戻ったところだ。それより……」

目立たないように外で、と思っていたのに台無しだ。店中からビシビシと視線を感じるの、気のせいだと思いたい。

「どこに行くつもりだった?」

「えっ?」

「逃げられると思ったか?」

笑顔で詰め寄られて、ぎくりと頬が引きつった。ちゃんと待つつもりだったが、逃げたいと思っていたのもまた事実だった。

「ち、違います。仕事が終わったのに店内にいても迷惑だから、外で待とうと思っただけで……」

慌てて言えば余計に怪しいのはわかっているが、どうしてもテンパってしまい口調が早くなる。

そんな私を数秒、じっと観察したあと、彼はふっと口元を緩めた。

「そういうことにはしておこうか。……行こう。外に車を待たせてある」

あとずさりかけていた私の左手が、彼の右手にすくい上げられた。そのままエスコートでもするように軽く引き寄せられる。

その途端、「ひゃあああ、素敵っ」と力の抜けた叫び声が聞こえた。

あれは多分、香山さんの声だったように思う。

車を待たせてある。

その言い回しになにかひつかかるものがあつたけど、外に出てみれば待っていたのはいかにも高級そうな、運転手つきの黒塗りセダンだった。

——外回りから帰ったとこ、とか言つてなかった? 普通、こんなんで外回り行く?

王子様ともなれば、営業相手も私が思うようなものとは違うのだろうか。

促されるままにそれに乗り込むと、後部シートは車の中とは思えないほどふかふかだった。

座っているのが恐れ多くて、つい肩が縮こまる。落ち着かなくてきよろきよろと車内を見回していると、隣に座る彼と目が合い、ふわりと微笑まれた。

後部座席にふたりで座るのは居心地が悪いが、運転手さんがいてくれてよかった。こんな狭い密室にふたりきりという状況は避けられたのだから。

できる限り窓側に寄って身を小さくし、私は渋々ながらも覚悟を決めた。車がどこに向かっているのかは知らないが、誘いに応じたのは食事をしたかったからではない。ちゃんとお礼を言うためだ。

「あの……就職に力を貸してくれてありがとう……ごじます」

幼馴染といっても仲がよかったわけじゃなく、距離感がかめなくて口調が硬くなる。すると、彼の眉間がびくりと痙攣した。

「まだ思い出せないのか」

私がまだ、彰くんの正体にたどり着いていないと思われたのだろう。

実際、一見穏やかそうな表情を浮かべる彼を見ると、終始邪険にされていたという記憶と一致しなくて自信がなくなる。

だけど、時折ちらりと意地の悪そうな光が宿る目には、確かに既視感があった。

——ほら、今もまた。

笑っているのに、なんだか追い詰められているような気持ちにさせられる、そんな目だ。

「彰くん……だよね？」

「当たり前。遅いな、気づくのが」

「だって、わかんないよ。名字が違うし」

「ああ……そうか」

彰くんは「茉奈は知らなかったか」と小さく呟き、納得したようにうなずいた。

私はいつそうわけがわからなくなって首を傾げる。

「中学を卒業したあと、母親に連れられて柏木の本家に来た。それから柏木を名乗ってる」

「そうなんだ……」

そういえば昔、彰くんの家は母子家庭だということのようなことを聞いた気がする。はつきりと覚えているわけではないけれど、今の彼の話を聞いてぼんやり思い出した。

社長とお母さんが再婚した、ってことかな？

私に考えつくのはそれくらいだったけれど、彰くんの言い方はなにか釈然としなかった。けど内容が内容だけに、私から聞くのも躊躇われる。彼もまた、それ以上説明する気はないらしい。

この話は終わりとばかりに、話題は今夜の食事に移った。

「茉奈。なにが食べたい？ 和食でいいなら、馴染みの店があるが」

「えっ！ いや、私は本当に、雇ってもらったお礼が言いたかっただけだから」

慌てて両手を振って、もう一度「本当に助かりました、ありがとう」と頭を下げた。

だが、しばらく待っても返事がない。

顔を上げると、彼は微かに眉を寄せていた。

「彰くん？」

「なにか用でもあるのか？」

「え？ 別にそうじゃないけど」

やんわりとお断りすれば大丈夫だろうと思っていた。彼だって、わざわざ私と食事をしたいとは

思わないだろうと。

久々に会ったからちよつとからかいに来たか、顔だけでも見ておこうという、その程度のお誘いだと思つたのだ。

だが今、彼は機嫌が悪い……ような気がする。表情の変化はわずかだけれど、声が低くなつたように感じるし、こちらを見る目は若干、鋭い。

「だったらいいだろう。食事くらい付き合え」

「えっ……で、でも彰くんだって、私と食事に行つてもつまらないでしょ？ それに、お礼なら……私が出さなきゃいけないけど、今はちよつと持ち合わせが……」

食事をお礼とするなら、懐具合が心配だ。しかも、彰くんが連れていつてくれる店なんて、私には敷居も金額も高そうだった。

恥を忍んでここはお断りし、後日お礼に菓子折りでも持つていこう。それで食事も回避できると考えた。

しかし答えは、ノーだった。それどころか、呆れたように息を吐いて笑われる。

「葉奈に出させようなんて、最初から思っていない」

「や、でも、それじゃお礼にならないし」

「もうすぐ着く。自分が勤める会社の重役の誘いを断るとは、なかなか気が強くなつたな」

機嫌が悪いとはいえ、随分な物言いだ。彼が私よりもずっと上の地位にいることはその通りで、確かに本来逆らえる立場ではないのだが、かちん、と頭にきた。

「そんな言い方って——」

「お礼なら」

言い返そうとした私の言葉を遮つて、彰くんが私のほうへ身を乗り出してくる。驚いて身体をドアへ寄せたが、彼はさらに距離を縮め、私のシートの背もたれに片肘をついた。

「別の形でもらうという方法もある」

頭の中にクエスチョンマークがいくつも浮かぶ。別の形、というのがなにを指しているのかもわからないが、今のこの距離感が一番の疑問だった。

「え……え？」

彼の手が私の顔のすぐ近くにあつて、指先が髪を絡めとつた。

久しぶりに会う幼馴染に対する接し方ではない……と思うのは、私が自意識過剰なのだろうか？ いや違う、絶対にありえない距離感だ。

頬が熱くなつていることに気づかれなくなくて、なんでもないフリをしてやり過ぎそうとする。けれど、発した声は上ずつていた。

「べ、別の形、って、どういう……」

「どうしたら、礼になると思う？」

わからないから聞いたのに、逆に聞き返されて言葉に詰まる。

とん、と膝になにかが当たつて、びくつと身体が跳ねた。ちらつと視線を向ければ、彼の膝が触れていたの、そろそろ足を遠ざける。

そしたら今度は、頬になにかが当たる。視線を上向けると、さっきよりもぐっと近づいた彼の顔が真正面にあった。

私の髪を撫でていた指が、いつの間にか頬に移っている。さらさらど、頬がくすぐりたい。

「あ、あ、あのっ……」

「なんだ？」

「ひゃっ」

また身体が近づいてきて、今度は膝どころか腰やら太腿やらがびったりと彼に密着した。

彰くんの体温が感じられ、私の鼓動まで向こうに伝わってしまいそうで、焦りと困惑から私はついに音を上げた。

「お、お食事付き合います。付き合うから、ちょっと離れてっ……」

お願いだからこれ以上近づかないでくれ、と身体を硬くしてぎゅっと目を閉じ、全身で意思表示をした。

顔が熱い。きつと真っ赤になっている。それを間近で見られていることも辛い。

そのままじっとしていると、くっくっく喉を鳴らすような笑い声が出た。

「……彰くん？」

おそろおそろ目を開ける。すると、身体の距離こそ離れていないけれど、彼は顔を少し伏せていた。肩が揺れていて、笑っているのが丸わかりだ。

その態度にびんと来て、私はいつそう顔を熱くする。今度は怒りが原因だけれど。

「かっ……からかったのっ!？」

「いや、そんなつもりはない、んだが……つくく」

「笑ってるじゃない！ もう離れて！」

どんつと彰くんの胸を押したが、彼を少し揺らした程度で、それくらいではさしたる効果はなかった。

彼自身、これ以上近づくんつもりはなかったらしい。笑いすぎて涙目になった顔を上げ、ちらりと横目で視線を投げてくる。

やはり綺麗な切れ長の目で、不意打ちをくらった私は、ドキリとさせられてしまう。

「すぐ馬鹿にしてっ……」

「可愛いな、お前」

「えっ」

意表を突かれて、思考がびたりと停止した。

固まる私から彼はゆっくりり身体を離し、最後に私の頬を撫でていた指がいつと顎下をくすぐっていく。

「食事に付き合え。それが礼の代わりでいい」

ふっ、と唇に薄く浮かんだ笑みからは、大人の男の色香が漂う。それは私の心を簡単にざわつかせた。

連れていかれたお店は、看板などがなく控えめに暖簾がかかっただけの、隠れ家のような高級料亭だった。

ジーンズに白のブラウスというあまりにもラフな出で立ちだった私は、彰くんの陰に隠れるようにして店内を歩く。

そんな私を見た彰くんに、またしても鼻で笑われたのが悔しい。「食事」と言つてこんな高級料亭に来るなんて、想定していないのが普通だと思う。

やっぱりついて来るんじゃないかと腹を立てたけれど、それは最初だけだった。

出てきたお料理がとにかく素晴らしかったのだ。特に「オニエビ」とかいよいよ知らないけど珍しいエビが、信じられないほど甘くて美味しかった。

決して、お料理で誤魔化されたわけではない。そうではないけれど、美味しいものを目の前にすると、人つていつまでも不機嫌ではいられないものだ。

経験したこのない美味しさに、夢中になって食べていた。無意識に頬が緩んでうっとりとして幸せに浸っていた時、見つめられていると気がついた。

「な、なに？」

がつついて、みつともないと思われただろうか。慌てて表情を取りつくり彰くんを睨みただけで、思いもよらず彼は優しい笑みを浮かべていた。

「いや。美味しいな」

目の前の器に視線を戻し、薄く微笑んだ彼の横顔を、やはり美しいと思つてしまった。

帰りの車の中で、私は素直に彼に頭を下げる。

「ご馳走様でした。すごく美味しかったです」

口の中にエビの旨味がまだ残っているような気がする。忘れたくないと思うくらいに、本当に美味しかった。

「オニエビが食べられたのはラッキーだったな」

ああいう料亭に行き慣れてそうな彰くんが言うのなら、きっと本当にラッキーだったんだろう。

このままずっと余韻に浸っていたかったが、窓の外の景色を見ると、そういうわけにもいかなかった。私のアパートの最寄り駅に近づいていたのだ。

「あ、その先にある駅の前で降りしてください」

運転手さんに向かってそう言うと、隣から声がした。

「家まで送る。この近くなんだろう？」

「でも、結構駅から外れたところだし、道幅が狭いの。ここで十分だから」

狭いだけでなく、アパート周辺は道が入り組んでいる。こんな大きな車じゃ通りにくそうだと思ったのだけど、彰くんは私が嫌がっていると捉えたらしい。

「駅から遠いってわかっているのに、ここで降りすほうがどうかしてる。いちいち逆らわないで大らしく座ってる」

呆れたような声は、少し怖かった。

「でも……」

たったこれだけのことで、どうしてそんなに機嫌が悪くなるのか。

この短い時間で、気づいたことがある。彼は、人の目がある時は人あたりのいい穏やかな表情を浮かべているけれど、私とふたりか、もしくは運転手さんと三人の時には、その仮面が剥がれるようだ。

すぐに不機嫌になったり、笑ったかと思つたら意地悪な笑みだったりするし、私の反論など聞き入れない。今もそうだ。

私の言葉なんか聞かずに、問答無用で運転手さんに告げる。

「佐野、彼女の家まで行つてくれ」

「かしこまりました」

運転手さんは、どうやら佐野さんというらしい。五十代くらいの優しそうなおじさんで、私に気を遣つてくれたのだろう。バックミラー越しに、にこりと微笑んでくれた。

アパートまでの道を聞かれて答えていると、さすが運転をお仕事にしている人だなと思つた。難なく細い道を抜け、すぐにアパート前に着く。

歩けば三十分の道のりだ。送つてもらえたのは、確かにありがたかった。

「ここです、ありがとうございました」

お礼を言うと、車が緩やかに停車した。佐野さんが運転席を降りて、後部座席のドアを開けてくれる。

こういう扱いをされることに慣れなくて、恐縮して肩を竦めながら車を降りた。

「……ここに住んでるのか？」

「えっ？」

声に驚いて振り向くと、どうしてか彰くんも車から降りるところだった。

「そう、ここの一階の角」

我が家の窓を指さして彼を見れば、眉間に皺を寄せている。

このあたりは一応住宅街だが、空き地や空き家が多く、街灯も少ない。暗い夜道を一人で歩くのは怖いけれど、この乏しい灯りの下で彰くんの不機嫌な顔を見るのも、これはこれで怖い。

彼は眉を顰めたまま周囲を見回して、ぼそつと呟く。

「女が一人暮らしするような環境じゃない」

「……急に引越すことになって、あんまりゆっくり選んでる余裕がなかったの」

「だからと言って、もう少し……選びようがあるだろう」

選びようって……せめてオートロックがあるとか、つてことだろうか？

前に住んでいたところは一応オートロックだったけど、管理人さんが常駐していなくてあんまり意味がなかった。住人のあとに続いて、しれつと入つて来られるのだ。

中途半端なセキュリティはあまり意味がないと悟り、それならなくてもいいかと家賃重視で選んだのがこのアパートだったのだけれど、そこまで愕然とされるほどひどいだろうか？

それに、十数年ぶりに再会しただけの幼馴染に、住居のことまでとやかく言われるのはあまり気

分のいいことではない。

「駅から遠い分家賃が安いし、助かってるの！ それに女の人も住んでるよ。見かけたから」ムツとして少し語気を強めて言うと、私は彼と運転手の佐野さんに向き直り、ぺこっとお辞儀をした。

「送っていただいて助かりました。それと彰くん、雇ってくれて本当にありがとう。精一杯、バリスタとして努めさせていただきます」

丁寧な言葉遣いで改めてそう言ったが、多分あまりいい態度ではなかっただろう。彼の無言が少し怖い。眉間の皺しわが、今ので余計にくっきりと刻まれた。

……しまった。怒らせた。

「じゃあ」

逃げるように踵かかとを返してアパートの階段へ向かおうとした。けれど手首をうしろからつかまれて引き留められる。

「茉奈」

手を引かれ、名前を呼ばれて反射的に振り向く。

すると目の前に彰くんの胸元があつて、思っていたより間近に彼が立っていたことに驚いた。

手首をつかまれたまま、徐々に視線を上げる。どうしてだか、彰くんはひどく真剣な目で私を見下ろしていて、彼の視線に容易たやすく捉とらわれてしまう。

「あ、の……」

「今日は会えてよかった」

さらりとそんな言葉を吐きながら、彼の指が私の頬に触れた。どくん、と心臓が跳ねる。

……お、怒ってるんじゃないの？

混乱した。こんな触れ方を、違和感なく受け入れるような仲ではない。

けれど彼はおかまいなしに親指で頬を撫なでてきて、私は固まってしまつて動けなかった。

彼が当然のように顔を近づけてくる。キスするつもりだと気づいた時には、さすがに手が動いた。「やっ、なんでっ……!!」

空あいていた左手が、とっさに彼の頬めがけて飛んでいく。けれどその手も呆気なく捕まつて、もうなつたらもう、びくともしなかつた。

それでも抵抗しようと首を竦すくめる。だけど両腕をぐっと引かれて、抵抗などなんの意味も成さなかつた。

どうして、なんで、と頭の中で繰り返しながら、ぎゅっと目を瞑つぶる。

ふっと唇に吐息が触れて、それだけですぐそこまで彼の唇が迫っているのがわかつた。

唇を強く結んで、泣き出しそうになるのをこらえる。

そうやって口を頑かたなに閉ざして、そのまま数秒が経過した。いつまで経つても、触れてくる気配がない……と思つたら、額をこつんとぶつけられた。

驚いて目を開くと、彼の黒い瞳がすぐ目の前で揺れている。

「いくら気が強くなつたといつても、男の力にかかつたらこんなものだ。人の忠告は素直に聞き入

れる」

「……え？」

「無防備だからこんな目に遭う」

その瞬間、柔らかに、少し湿ったものが触れたかと思ったら、そのまま唇を塞がれていた。「んっ……うっ？」

舌で唇をなぞられ、ぞく、と身体の芯が疼くような感覚が全身を駆け抜けた。その感覚に怖気づき、思わず一歩あとずさる。

だが、彰くんも一歩踏み出し、私の身体をさらに引き寄せる。それと同時に、彼の舌が私の唇を割って固く噛み締めた歯を撫でた。

逃がしてはもらえない。けれど激しいものでもない。

柔らかい舌に歯列をくすぐられ、私の身体からはとろけるように力が抜けていく。固く拒絶する私を少しずつ緩ませていくような、なだめるようなキスだった。

「んんっ……」

腰が甘く疼いて、身体が震える。

力の入らなくなった私に気づいたのか、彰くんは私の手首を離すと、その手で腰を抱き寄せた。身体が密着し、首がのけぞる。

息苦しかった。呼吸が辛く、我慢できずにキスの合間に息を吸い込んでしまう。

「ふあっ、……う、んんっ……」

その隙をついて、ぬるりと舌が口の中に入ってくる。私の舌は逃げるように奥へ引つ込もうとすけれど、彼の舌先が深く追いかけてきて絡め取られた。

——どうして？

ただただ混乱して、キスに抗う余裕がなかった。どうして彼が私にキスをするのか、わからない。わからないまま、翻弄される。

舌先が絡まり、混じり合った唾液で口の中がたっぷりと濡れていく。

舌でそっと上顎を撫でられ、膝の力が抜けた。がくがくと膝が震えて崩れそうになる私を、彰くんの手がしっかりと支えてくれる。

頭の芯まで溶けそうになる寸前、舌先を吸い上げられて甘噛みされた。かと思うと、急に舌が引き抜かれ、最後にちゅっ唇を啄まれる。離れていく唇を唾液の細い糸が繋いで、音もなく切れた。

「無防備だとうなる、という忠告のつもりだったんだが」

くっ、と喉を鳴らすような笑い声をして、我に戻った。

「は、離してっ！ ばか！」

どん、と彰くんの胸を押すと、さっきはびくともしなかった身体がたやすく離れる。といっても、押した反動であとずさったのは私のほうで、彼は少し肩を揺らした程度だったけれど。

——私、夢中になりかけてた。

そう気がつくと、かあつと顔も身体も熱くなり、汗が滲んだ。それを誤魔化すように彼を非難するが、声はどうしても震えてしまう。

「ちゅ……忠告のためにキスするなんて、最低っ！」
ひどい。最低だし、悪趣味だ。

こっちが必死で威嚇しているというのに、彰くんは素知らぬ顔で腰をかがめ、なにかを拾い上げる。

「少しは警戒心持てよ。嫌いな男に触れられたくなかったら」

また一步彼に近づかれ、身体が怯えたように硬くなる。が、なにかを差し出されて渋々片手を出す、小さなビジュートのついたヘアピンが手のひらにのせられた。

前髪を留めていたものだが、さっき彰くんを押しした拍子に落ちてしまったらしい。

「どうした？ 早く行かないとまた同じ目に遭うぞ」

そう脅されて、びくつと肩が跳ねた。

「か、帰るー！」

ヘアピンを握りしめ、慌てて踵を返して逃げるように階段へ向かう。いつもなら静かに上がるのに、気遣う余裕がなくてカンカンカンと大きな音を立ててしまった。

二階まで上り切った時、「某奈」と名前を呼ばれ、顔だけそろりと振り向かせる。

彼はさっきと同じ場所で、こちらを見上げていた。

「おやすみ。戸締まりしろよ」

言われなくても、普段からちゃんとしてるし。それにあんなことをされれば、いつもより嚴重にするほかない。

私はなにも答えず、ぷいっ、とそっぽを向いて小走りで玄関扉の前まで行くと、バッグから鍵を取り出して鍵穴に差し込んだ。

——手、震えてる。

悔しくて、唇を噛み締めながら急いで中に入り、しっかり鍵とチェーンの両方をかけた。

そのまましばらく耳をそばだてていると、外から微かに車のドアが閉まる音が聞こえてくる。それでようやく気が抜けて、私はへなへなとその場にへたり込んだ。

「……やっと帰った」

どっと疲れを感じた。

ひどい。いくらなんでもキスはやりすぎだ。

私が嫌々送られたことも、アパートをけなされて可愛げのない態度を取ってしまったことも、それら全部が気に入らなかつたのだらうけれど、こんな脅し方はない。

私だって本当は、もうちょっと小綺麗で、治安のよさそうなところにあるマンションを借りたかった。

けれど引越しを急いでいたし、経済的な面でも仕方のなかったことなのに、あんな風に言われたら情けなくなってしまう。

「……結局、彰くんはなんの話がしたかったのかな」

溜息とともに呟いて首を傾げた。

今日の会話を思い出してみたけれど、これといった話を振られた覚えはなく、ただ雑談して美味

しいものを食べただけ。そして最後に……怒らせて、あんなキスをされてしまっただけだ。思い出すと、にわかに頬が熱くなった。

その熱を振り払うようにぶるんと頭を振って、床に手をつき立ち上がるとした。その時、指先にリノリウムの床材ではない、紙の感触が触れた。

「……あれ？」

たまに新聞受けから広告が差し入れられて、床に落ちていることがある。

だが、ただの広告にしてはしつかりとした、少し厚めの紙のようだった。暗くてよく見えなかったのも、それを拾いながら立ち上がり、片手で壁にある電気のスイッチを入れる。

それは、黒い封筒だった。

靴を脱いで部屋に上がりながら裏返してみるが、差し出し人が書かれていない。宛先もだ。そもそも、郵便で届いたのなら、ここではなく一階にある集合ポストに届くはずだ。

——なんだろう。黒い封筒って、なんか不気味。

ぞく、と背筋が寒くなる感覚に襲われながら、ラグの上に座り封筒を開けた。

「……なに、これ」

中には、なにも書かれていない白の便箋が一枚、四角に折られて入っただけだった。

転職してから、約一ヶ月。梅雨^{つゆ}独特の蒸し暑さがじわじわと体力を削^くぎ季節だ。

十代の頃にはさほど気にならなかったが、二十代もなかばになると気候から来る身体へのストレスに、疲れを感じる時がある。

「梅雨^{つゆ}の時季って、なんか身体重くない？」

レジに立ちながら、少しだけ背中をそらして軽く肩を回した。今日は客足が少なく、そのせいか時間の経過がひどくゆつくりと感じられ、余計にだるい。

「そんなオバサンみたいなこと言わないでくださいよ……立河さん、もうすぐ王子が来られる頃じゃないですか」

香山さんが、店内のかけ時計を見て言った。

「そーだね……」

「王子、絶対立河さんに会うために来てますよね」

どうしてか、香山さんは嬉しそうだ。というより面白がついているのかもしれない。あれから、彰くんは毎日店を訪れるようになった。

まず、ランチにはテイクアウトでコーヒート、シリアルバーやサンドイッチなどを買いにくる。

夕方は、毎日ではないけれど店内でカフェラテを飲む。座るテーブルは決まって、窓際が一番端だ。仕事上がりの時もある、残業前に休憩がてら訪れる時もある。

そして仕事上がりの場合、食事の誘いをされることが多い。

はつきり言って、なにがしたいのか全然わからない。